論文

# 召人浮舟入水と続篇の物語主題

## ―身代りの〈生〉の反復と離脱―

東原伸明

### 1　宇治川の川音―心象の叙述

宇治の川に寄るほど、霧は来し方見えず立ち渡りて、いとおぼつかなし。車かきおろして、こちたくとかくするほどに、人声多くて、「御車おろし立てよ」とののしる。霧の下より例の網代も見えたり。いふかたなくをかし。みづからはあなたにあるなるべし。まづ、かく書きて渡す。

（道綱母）人心うぢの網代にたまさかに寄るひを（氷魚・日を）だにも尋ねけるかな

（兼家）帰るひを（日を・氷魚）心のうちに数へつつ誰によりてか網代をも訪ふ

（角川ソフィア文庫105頁）

宇治は京都府の南部、宇治川に沿った一帯で奈良時代には近江から、平安時代には京から大和への交通の要衝としてあり、初瀬詣での道筋にあたる。『蜻蛉日記』には、宇治を象徴する「霧」「網代」「氷魚」といった典型的な景物の描写と、その文学的な形象を見ることができる。これらの景物が実景であるとともに、作中人物である道綱母の心を反映した心の景色、心象風景であることは言うまでもない。『源氏物語』も、そうした景情一致した描写技法の延長線上にあることは間違いない。だが、しかし、『源氏物語』の続編・第三部の世界の特徴は三田村雅子も説くように、風景の描写そのものよりもむしろその音、荒々しく響く宇治川の川音の叙述に比重が懸けられている(1)。川音による心象の叙述である。

……「宇治」といふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ。思ひ棄てたまへる世なれども、〈今は…〉と住み離れなんをあはれに思さる。／網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせん。

（小学館新編全集「橋姫」⑤125～126頁）

三田村雅子は、《「耳かしがましき川」は客観的な宇治という土地の紹介であると言うよりは、出家を果たそうとして果たし得ない八宮内部の現世への執着へのやましさとして聞こえてくる雑音なのではないだろうか。俗聖として矛盾した生き方を送る八宮のあいまいさのきしみとして、都にいる頃よりも一層宇治では俗世間を象徴する川音が音高く響いてくるのである》と言う(2)。

浮舟を入水へ向かわせる場面においても、川音の叙述と描写が彼女の心を反映しており、死へと追い詰められてゆくのである。

……など、言ひかはすことどもに、いとど心肝もつぶれぬ。〈なほ、わが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ〉と思ひつづくるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、……

（「浮舟」⑥167頁）

宇治川のかしがましい川音は、〈浮舟入水〉という悲劇のモチーフを奏でる通奏低音として、物語の低部を流れている。

## 2　身代りの〈生〉と〈性〉―モノとしての始発

浮舟は物語に登場してきてもほとんどことばを発しない。意思や主体性といったものが感じられないほど、ひどく寡黙な主人公として始発する。なぜなら、彼女はヒトではなく、モノとして登場させられているからである。

浮舟はまず、〈口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし〉（「宿木」⑤382頁）という薫の要請に答えるかたちで、亡き大君の「形代」として登場させられてきた。薫は大君の「人形」を作り、絵に描き勤行をしたいと中の君に語るのだが、大君の「ゆかり（血縁）」＝身代りとして薫から度々恋情を訴えられていた中の君は、その思慕を逸らすために、「あやしきまで昔人の御けはひに通ひたり」（同450頁）と、八の宮の隠し子である異母妹、浮舟の存在を明かすのである。

この薫と中の君とのやりとりにおいて、薫が、漢の武帝が李夫人の絵姿を作らせた故事などを念頭に「人形」の話をしている（『河海抄』）のに対して、中の君は「うたて御手洗川近き心地する人形」（448頁）と、禊で川に流される「人形」の意に曲解をしている。さらにその後の贈答では両者とも、「撫で物」に喩えている。

薫　見し人の形代ならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむ

中の君　みそぎ河瀬々にいださんなでものを身に添ふかげとたれか頼まん

「撫で物」は通常、祓へにおいて川に流される紙の「人形」で、人々の罪や穢れを吸収させられ代りに川に流し捨てられる贖罪の山羊のことである。彼女が「贖罪の女君」などと言われる所以である(3)。浮舟は、その登場以前からすでに川に流されること、「入水」、宇治川への投身を運命づけられていたと考えるべきであろう。ヒトではなく、「人形」「形代」というモノ、人々の身代りとして登場させられたのであるから、意思や主体性が無いのも当然である。死と再生の論理からすれば、再生後の浮舟はまた別の人格を獲得したということになる。

ところで、藤井貞和の指摘にもあるように、薫と中の君とではその認識においてズレがあり、薫にとっては「撫でる物」、フェティッシュの対象であり、中の君とっては、自己の身代りとしての贖物である(4)。そのことは換言すれば薫にとって中の君自身は、大君の「ゆかり（血縁）」ではありえても「形代」ではないからである(5)。また、中の君にとって浮舟は、薫の恋慕を逸らすための手段、中の君自身の身代り、「人身御供」にほかならない。したがって浮舟の入水は、第一には中の君の「贖罪」のためということになる。続篇においては、正篇の男／女という単純な差別の図式は崩壊しており、貴人／召人という新たな差別の公式が提示されているのである。続篇の「女」は単に「女一般」を指示しているのではないということだ。「召人」という貴人の身代りをしていた「女」の存在に光が当てられることにより、おのずと正篇とは差別のイデオロギーが異なるのである。

## 3　「召人の子」の物語主題―母の〈生〉の反復というアイロニー

さて、続篇の物語にモノとして登場させられた浮舟は、『源氏物語』の梗概類等では、宇治の八の宮の娘、大君・中の君の腹違いの妹などとしての紹介がなされている。しかし、腹違いと言っても、母親は「中将の君」という上臈の女房であり、八の宮の手が付いたことで妊娠をし、浮舟を産み落とした。中将の君は、北の方の姪であり、その血縁で宮家に出仕していたのだが、最愛の北の方を亡くした八の宮は、おそらくは亡き北の方の「ゆかり（血縁）」として彼女を愛したのであり、中将の君という個人を愛したのではなかった。つまり、亡き北の方の代替物、身代りのモノとして、彼女を召したのである。

中将の君という女房＝召人、その召人の子である浮舟は、したがって八の宮からは認知された子ではなく、宮家にとっても「三の君」と呼べる存在ではなかった。彼女は皇女ではなく、ただ「召人の子」にすぎないのだという事実を、我々読者は直視しなければならない。その彼女を、ともかくも、続篇の物語は女主人公として選びとったということを。

原岡文子は慎重に、《薫にとっても、匂宮にとっても、浮舟は限りなく召人に近い存在である》という(6)。しかし、もう一歩踏み出して、三田村雅子のようにはっきりと断言してしまおう、《召人で、形代で、かつゆかりである女として、浮舟は源氏物語最後の女主人公となる。生まれも育ちも高貴な姫君達の物語ではなく、その周辺をとりまき、ささめき合い、その身代りとなり、便宜的に代役を押しつけられてきた側からの物語が宇治十帖では志向されているのである》と(7)。ゆえに、「召人の子」は、そのままま、「召人」であるだろう。「召人」あるいは「召人の子」の物語主題が、続篇の物語が語ろうとしている内容ではないだろうか。

召人を主人公とした古代散文文学は、『和泉式部日記』というジャンル、日記文学というジャンルには先蹤があるが、物語文学においてはどうであろうか。『竹取物語』のかぐや姫が帝の仰せを拒絶することなく出仕していたら、おそらく身分は妃ではなく、帝の身の回りを世話をする女房のひとりであり、召人であっただろう。あるいはまた、『源氏物語』においても、明石の君が光源氏の召しに応じていたならば、やはり召人の境遇に留まっていたであったろうことは、夙に指摘されている(8)。しかし、それを拒否したことによってそれぞれ物語の主人公として、共に語るに足る人物として作中世界に生き延びてきたといえるだろう。召人ではないことによって、語るべき対象足り得たというわけだ。

『源氏物語』の正篇では、光源氏をはじめとして男主人公と交渉をもった召人は描かれているが、誰ひとりとして男主人公の胤を宿した召人というものは描かれることはなかった。正篇において端役ではありえてもヒロインたりえない召人は、したがって子を宿すこと、召人が子を生むことはタブーである。最初から語る対象たりえない召人は、貴人たちの性の慰みものに徹しなければならない。対して続篇の物語は、「召人」中将の君とその「子」浮舟の存在に焦点を合わせ、主題化している。中将の君の人物造形には、召人たることを拒否するプライド意識が伺える(9)。

〈我も、故北の方の方には離れたてまつるべき人かは、「仕うまつる」と言ひしばかりに数まへられたてまつらず、口惜しくてかく人には侮らるる〉と思ふには、……

（「東屋」⑥42頁）

一夫一正妻多妾制という『源氏物語』の婚姻制度にあって(10)、召人は婚姻の数には入らない、ツマではないが、しかしツマ的な存在なのである。

その召人の彼女の血縁的なプライド意識〈我も、…〉に着目する鈴木裕子

は、《常陸介の後妻の連れ子浮舟は、常陸介の継子でしかない。薫のような高貴な男君と結ばれるなど有り得ないことなのであった。その有り得ないことを物語世界の現実として現していく原動力のひとつとして、母中将の君のぬきさしならぬ情念が発動しなければならなかった》と説く[11]。

その浮舟ふぜいを、あえて「君」「御方」「女君」「姫君」という呼称をもって語るのは、中将の君の目の高さに沿った〈語り〉であり、続篇を語る（→騙る）語り手（→騙り手）の語り口（→騙り口）だと理解すべきだろう。そのことは例えば、母中将の君の現在の呼称「常陸殿」、その「殿」という受領の奥方に用いられる敬称さえもが、匂宮の歳若い供人どもからは侮蔑の対象とされている事実から判る。

若やかなる御前ども、供人「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、〈げにこよなの身のほどや〉と悲しく思ふ。ただ、この御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしくおぼえける。まして、正身をなほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしう思ひなりぬ。（同58頁）

皇族の供人の目の高さからすれば浮舟ごときは姫君どころか、単に受領の娘としてしか見られないのもいた仕方のないことだ。八の宮の血を引く貴種性が、女主人公として語る（→騙る）べき唯一の拠り処にすぎない。鈴木裕子の指摘する《母中将の君のぬきさしならぬ情念》も、浮舟の実父が八の宮という血統の良さ、血筋という一点のみに賭けられている。

その血筋、義姉中の君を頼って二条院の西の対の屋に移った。その時点において初めてモノである浮舟に、ヒトとしての意思の萌芽が現れる。登場時点においは心中を語る叙述が皆無であった浮舟の気持が、ここにおいて初めて内話文〈　〉として語られている。内話文は、登場人物の心の中の叫びが独白（モノローグ）の直接言説として表出されたものだ。

〈いとうれし〉と思ほして、人知れず出で立つ。御方も、〈かの御あたりをば睦びきこえまほし〉と思ふ心なれば、なかなかかかることどもの出で来たるを〈うれし〉と思ふ。（40頁）

「御方」の呼称は浮舟であるが、「御方も」の「も」に注目すると、直前の母中将の君の内話文〈いとうれし〉と対応して、後文の〈うれし〉という浮舟の内話文が導き出されてきていることが解かる。

平林優子は、《浮舟の気持ちを描きながらも、それが母中将の君の気持ちと決して無縁ではない》とし、《浮舟は母の思いをそのまま自らの思いとして生きていると言える》と言う[12]。そうだとすると浮舟と中将の君とは、言はば〈一卵性の母子〉だ。その始発において浮舟は、母の〈生〉を反復するかのごとく貴人の召人としての〈生〉を、代りに生かされていると言える。「母の〈価値観〉を生きる娘」である。これは〈語り〉の方向性がアイロニーにあり、娘の幸福を願う母の判断はいつも錯誤的で、愚かな母として語られることとパラレルである。「中将」の「君」は、正篇においては典型的な召人の呼称であり、「中将」の「中」は、男女の仲介者の意だが、ここには娘の縁までも錯誤的に仲取り持ちする者としてのアイロニーがある。中将の君は、己が貴人のツマとして「数まへられ」なかったその過去を、娘の人生において逆転的、代替的に解消することを目指していたのではなかったか。薫の眩い容姿を目の当りに愚かにも、七夕のように年に一度の逢瀬でもよいのでは

ないかとさえ思ってしまう。

匂宮と中の君夫妻の様子を見た時の感想に、「故宮のさびしくおはせし御ありさまを思ひくらぶるに、〈宮たち〉と聞こゆれど、へいとこよなきわざにこそありけれ〉とおぼゆ」（同43頁）とあって、八の宮のように斜陽の皇族もあれば、匂宮のごとき時勢に乗った皇族もあり、貴人もそれぞれであると思っている。続篇の物語の始発において八の宮は、「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」（「橋姫」⑤117頁）と語られており、浮舟の父親も母親同様「数まへられたまはぬ」存在ではあった。

同じ貴人ではあっても薫の方をよしとするのには、匂宮が中の君の夫だという理由だけではなく匂宮が浮舟を「侮りて押し入」ったことによる。ただし、中将の君は、俗聖であろうとする薫の正体を知らない。では薫の正体とは何か？

## 4 「俗聖」の正体―八の宮の鏡像としての薫

「俗聖」は、『源氏物語』には用例が一例しかない語ではあるが、三宝に帰依し五戒を受けた在家の仏教者を意味する「優婆塞」という語の指示する内容を、『源氏物語』の書き手が敷衍化した造語であるらしい。当該「俗聖」は、八の宮と親交を結んだ宇治山の亜闍梨が、都の冷泉院に彼の存在を紹介する遣り取りの中で、次のように叙されている。

阿闍梨「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟深くものしたまひけるかな。さるべき生まれたまへる人にやものしたまふらん。心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖の掟になん見えたまふ」と聞こゆ。冷泉院「いまだかたちは変へたまはずや。『俗聖』とか、この若き人々のつけたなる、あはれなることなり」などのたまはす。／宰相中将も、御前にさぶらひたまひて、〈我こそ、世の中をばいとすさまじく思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ〉と人知れず思ひつつ、〈[redacted]になりたまふ心の掟やいかに〉、と耳とどめて聞きたまふ。（「橋姫」⑤128頁）

八の宮における俗聖の呼称は、「この若き人々」らによって揶揄として付けられた渾名であることが解る。それを薫は〈[redacted]になりたまふ心の掟やいかに〉と、俗生活を送りながら「聖」に到達してしまった人物と理解してしまった。八の宮自身は絆しのために出家が叶わず、仕方なく在俗であるという事情を理解できず誤解しているのだが、しかしこの誤解は、薫の物語からの「俗聖」観として、「俗」ながら「聖」として生きることを理想とする、「俗聖」薫の生を領導するものであるから、内実はともかく、実態としては出家することなく俗生活を送りながら、なお「聖」であるという八の宮の存在は、薫にとっては理想的・模範的モデルなのであり、すなわち「法の師」なのである。

では俗聖としての八の宮の実相は、果たしてどのようなものであったのか。八の宮が俗聖とならざるをえなくなったのは、北の方の死を契機としている。振り返ってみれば八の宮と北の方との夫婦仲は、

深き御契りの二つなきばかりをうき世の慰めにて、かたみにまたなく頼みかはしたまへり。（「橋姫」117頁）

とあるように非常に良好なものであり、子供も大君・中の君という二人の皇女に恵まれたが、北の方が二人めの子、中の君出産の折、産後の肥立ちが悪く、この世を去ってしまった。

〈あり経るにつけても、いとはしたなくたへがたきこと多かる世なれど、見棄てがたくあはれなる人の御ありさま心ざまにかけとどめられる絆にてこそ、過ぐし来つれ、独りとまりて、いとどすさまじくもあるべきかな、いはけなき人々も、独りはぐくみたてむほど、限りある身にて、いとをこがましう人わろかるべきこと〉と思したちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆづる人もなくて残しとどめむをいみじく思したゆたひつつ、年月も経れば、おのおのおよすけまさりたまふ容貌のうつくしうあらまほしきを、明け暮れの御慰めにて、おのづからぞ過ぐしたまふ。（同119頁）

最愛の北の方を亡くし悲嘆に暮れる八の宮は、遺された姫君たちが絆しとなって一途に出家をすることもできず、また、周囲の勧める再婚にも聞く耳を持たなかった。

かかる絆どもにかかづらふだに思ひの外に口惜しう、〈わが心ながらもかなはざりける契り〉と思ゆるを、まいて、〈何にか世の人めいて今さらに〉とのみ、年月にそへて世の中を思し離れつつ、[redacted]になりはてたまひて、故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど戯れにても思し出でたまはざりけり。（同121頁）

あるいは、亜闍梨に語っているように、

八の宮 [redacted]蓮の上にのぼり、濁りなき池にも住むべきを、いとかく幼き人々を見棄てんうしろめたさばかりになん、えひたみちにかたちも変へぬ」など、隔てなく物語したまふ。（同127頁）

仕方なく在俗のままで、「心ばかりは聖になりはて」たような生活を続けていた。後に「宿木」巻で弁の尼の語るところによれば、そうした中で中将の君には、八の宮の手が付いたのだという。彼女は妊娠し、浮舟を生み落とした。八の宮は彼女とその子の存在を厭い、浮舟出生後は二度と逢わなくなった。居づらくなった中将の君は、陸奥の守（その後常陸守となる）の後妻となって下向をしている。

先の「橋姫」巻の「心ばかりは聖になりはて」た八の宮の立派な人物像と「宿木」巻で明かされる八の宮の姿とは、一見矛盾しているようであり、従来書き手の構想の変更と理解され説明されてきたところである(13)。だが、しかし、問題は構想が変更されたから八の宮の人物像も変更されたと単純に考えてよいものだろうかということである。むしろ、当然そのように描かれるべくして描かれたと考えるべきではないかというのが、私の考えである。これは我々読者が「俗聖」なるものを、どこか「聖人君子」と同一の理想的な宗教者と思い込んでしまっているからだろうと思う。たしかに「聖」は「聖人君子」であろうし、「優婆塞」も在俗の「聖」を指示していようが、八の宮が体現している「俗聖」は、「心ばかりは聖」だといっているだけで、行動は俗人と何ら変らないはずだったからである。「橋姫」巻の段階ではそれが語られていなかったにすぎないということではないのか。

男が道心に志し在俗のまま亡き最愛の女性を偲ぶかたわら、その「ゆかり（血縁）」ないしは「形代」の女性と性的な関係を結ぶ構図というのは、正篇の物語ではごくふつうのことであった。そのことを想起すべきだろう。そもそも光源氏の物語の発端で桐壺帝は亡き桐壺更衣の形代を希求し、藤壺の宮を得ているし、光源氏も亡き紫の上を偲び、生前紫の上付きの女房を寝所に侍らせ寝物語に思い出を語らせている。『源氏物語』の主人公たちの恋は、全篇を通じて「ゆかり（血縁）」と「形代」の論理に貫かれているといえるだろう。

絶えて御方々にも渡りたまはず、紛れなく見たてまつるを慰めにて、馴れ仕うまつる。年ごろ、まめやかに御心とどめてなどあらざりしかど、時々は見放たぬやうに思したりつる人々も、なかなか、かかるさびしき御独り寝になりては、いとおほぞうにもてなしたまひて、夜の御宿直などにも、「これかれ」とあまたを、御座のあたりひき避けつつ、さぶらはせたまふ。／つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりをりもあり。なごりなき御[illegible]につけても、……

（「幻」④522～523頁）

「心ばかりは聖になりはて」た八の宮が中将の君を慰めに召したのも、「聖心の深くな」った光源氏がその形代である召人たちを通じて亡き紫の上を偲んだように、中将の君の存在は、亡き北の方の姪、「ゆかり（血縁）」であったからこそであろう。北の方を深く愛していたからこそ、その「ゆかり（血縁）」の中将の君の肉体を通して北の方を偲び、寂しさを紛らわしたものと思われる。

かくのみ嘆き明かしたまへる曙、ながめ暮らしたまへる夕暮などのしめやかなるをりをりは、かのおしなべてには思したらざりし人々を御前近くて、かやうの御物語などをしたまふ。「中将の君」とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ。いとかたはらいたきことに思ひて馴れもきこえざりけるを、かく亡せたまひて後は、その方にはあらず、〈人よりことにらうたきものに心とどめ思したりしものを〉と思し出づるにつけて、かの御形見の筋をぞ〈あはれ〉と思したる。心ばせ、容貌などもめやすくて、〈うなゐ松におぼえたるけはひ、ただならましよりは、らうらうじ〉と思ほす。

（同526～527頁）

光源氏は、呼称も同じ「中将の君」を紫の上の「御形見」＝形代として愛し召した。対して続編の八の宮は北の方を愛する故に、亡き北の方の「ゆかり（血縁）」（でおそらく形代）として「中将の君」を、光源氏と同様に愛した。していることは同じであるが、不幸なことに後者の場合は、その「中将の君」が妊娠をして、浮舟という子まで産んでしまったことだ。光源氏の王権侵犯を主題とする正篇の物語においては、どれほど主人公である貴人が召人と性的な交わりを持ったとしても亡き貴人女性を愛しているが故に、彼女を偲ぶ行為として賞賛されることはあれ、何ら非難を受けることはあるまい。何度召しても子を身籠ることはありえない[14]。対して続編の物語は語る目の高さがすでに違うのだ。貴人の悩みを語るのではない。かつて貴人奉仕してきた女房たち、貴人の形代・分身として、身代りの役割に徹してきた彼女たちに焦点を合わせ、そのやるかたない心情を語らせようというのである[15]。

皇族・貴族、貴人の行為は、浮舟という新たな主人公を通して、糾弾されてしかるべきなのである。

薫　おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

（「匂兵部卿」⑤24頁）

自己の出生に疑義を抱く薫は、厭世の心が深く道心に志しているので、〈なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむ〉（同29頁）などと考えて、女性とは関係を持たないでおこうと思っていた。ただし、薫の婚姻対象とする女性とは、どうやら皇族や上流貴族の娘たちのことであり、女房階層の女は婚姻の対象外で、薫の意識の中では女性としての数の範疇に入らないようである。自身の性の捌け口として、女房たち、すなわち召人との性的交渉は、何ら道心とは関わらない。だから、

わが、かく、人にめでられんとなりたまへるありさまなれば、はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも、こよなくもて離るる心なくなびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを、人のためにことごとしくなどもてなさず、いとよく紛らはし、そこはかとなく情なからぬほどのなかなか心やましきを、思ひよれる人は、いざなわれつつ、三条宮に参り集まるはあまたあり。（同31頁）

とあるように、愛人としての召人は数多いた。彼女たちは薫が自分を顧みてくれることはあまり期待しておらず、薫との関係が跡切れないことだけを願っているというふうであった。

〈つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、絶えなんよりは〉と、心細きに思ひわびて、さるもあるまじき際の人々の、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。さすがにいとなつかしう、見どころある人のの御ありさまなれば、見る人みな心にはからるるやうにて見過ぐさる。（同頁）

薫にとって召人たちとの性交渉は始めから婚姻対象にはないので、彼女たちを蹂躙することに、少しも痛みを伴なわないのである。これより後に薫は、中の君を前に、大君を喪った傷心から、「慰めばかりに、ここかしこにも行きかかづらひて、人のありさまを見んにつけて、〈紛るることもやあらん〉など思ひよるをりをりはべれど、さらに外ざまにはなびくべくもはべらざりけり」（「宿木」⑤446～447頁）などと平気で言ってのけている。

「俗聖」を志向する薫は、その始発において八の宮を法の師として親交を結んだ。北の方死後、再婚を拒否し中将の君を召した八の宮と、貴人との結婚を拒否しつつも数多の召人と交わる薫とは、きわめて相似的であるといわざるをえない。貴人との婚姻を拒否し、欲望の赴くままに召人と関係を持つ、しかもそのことはなんら絆したりえない。八の宮と薫は同じ臭いのする、似た者同士であり、薫は八の宮の分身であり、鏡像である。こういってよければ、薫は、八の宮の生の軌跡をもどいているとさえ言えるだろう。ならば薫の妻妾たることを願う母は、愚かしくも最愛の娘に自己と同じ轍を娘に踏ませることになるのではないか。八の宮を厭いながら、自分の娘をまたも薫という名の八の宮の餌食になる。

## 5　入水＝身代りの〈生〉からの離脱

浮舟は〈身体〉の経験を通して思考する女であった。その始発においては、母子が一体化した〈一卵性の母子〉であり、母のことばと〈価値観〉とを忠実になぞり反復していた。母の〈価値観〉を身代りとして生かされていたといえるだろう。その〈価値観〉に忠実に、大君の形代、さらには中の君の形代＝身代りのモノとして薫に抱かれた。男は浮舟を形代というモノとしてしか見なかったが、逆に浮舟も、男たちを血の通った個々のヒトとしては捉えていなかった。たしかに薫は、母の〈価値観〉に沿っているという点では、一見理想的な男君に見えた。だが、それは〈観念〉であって、浮舟の〈身体〉を通した経験の産物ではない。薫は、母の〈価値観〉の〈象徴〉・〈喩〉的な存在ではあっても、生身の男とは言えない。匂宮にしても同様である。だからこそ浮舟は、薫を装った匂宮に犯されて、ヒトとして女としての〈性〉が開眼されたのだ。

……夢の心地するに、やうやう、そのをりのつらかりし、年月ごろ思ひわたるさまのたまふに、〈この宮〉と知りぬ。いよいよ恥づかしく、かの上の御事など思うふに、またたけきことなければ、限りなく泣く。

（「浮舟」⑥125～126頁）

ここで注意したいことは、浮舟自身は当初自分が、薫か匂宮かは別にしても、貴人に性的に召されるだけの存在だという認識がないことである。傍線部のように、匂宮の夫人である中の君に対して申し訳ないなどと思うのは、裏返せば、無前提に自身が彼女と対等の身分の人間だと思い込んでいるからにほかなるまい。すくなくとも召人であるという認識は欠落している。匂宮に犯されたことを契機に、彼女自身にヒトとしての自我が萌芽したのではないかと思われるのである。

御手水などまゐりたるさまは、例のやうなれど、まかなひめざましう思されて、匂宮「そこに洗はせたまはば」とのたまふ。女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、「時の間も見ざらむに死ぬべし」と焦がる人を、〈「心ざし深し」とはかかるを言ふにやあらむ〉と思ひ知らるるにも、……

（同130頁）

初心な浮舟には、匂宮の行為が自分を女房扱いせず対等の恋人扱いをしてくれたものと受け取り、男の深い情愛だと思い込んでしまう。この誤解は誤解だが、浮舟自身が自己の身体を通して獲得したものである。

橋本ゆかりは、《浮舟は沈黙する女であるとともに、「抱かれ」「臥す」女である》という[16]。橋本の論は、《他者の言葉》と言う〈観念〉の侵略に、〈身体〉で抗う浮舟を対象化しているが、橋本の説く《他者の言葉》を、母の〈価値観〉に置き換えてみるならば、浮舟が〈身体〉で抗うことはまた、彼女が自身の肉体を通して獲得した、その学習の成果であったとも言えようか。

匂宮と薫の差は、「抱かれ」た浮舟とのスキン・シップの度合いの差にすぎない。〈身体〉を通して、ヒトとしての〈性〉の快楽を知ってしまった浮舟は……。彼女は母から与えられたものではない、自己の〈価値観〉を独力で獲得してしまった。だから、匂宮に惹かれて行く浮舟は、匂宮という名前の男じたいに恋しているわけではない。他者から与えられたのではない、自己の〈意思〉〈自我〉〈価値観〉etcの萌芽を、肉体の疼きとして彼女自身が気づ

いてしまったのだ。と同時に、浮舟は思考の二重拘束（ダブル・バインド）に陥る。薫に象徴される母の〈価値観〉を捨てることも、反対に匂宮に象徴される自己の〈価値観〉を取ることも、そのどちらも選択することができないとすれば、どうしたらよいのか？臥して聞く浮舟の耳＝〈身体〉には、右近＝他者が語る男女の三角関係の話が、甘い囁きとなって響く。

わが心もてありそめしことならねども、〈心憂き宿世（すくせ）かな〉と思ひ入りて寝たるに、侍従と二人して、右近「右近が姉の、常陸（ひたち）にて人二人見はべりしを、ほどほどにつけてはただかくぞかし、これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それにねたみて、つひに今のをば殺してしぞかし。さて我も住みはべらずなりにき。国にもいみじきあたら兵（つはもの）一人失ひつ。またこの過（あやま）ちたるもよき労等（ろうとう）なれど、『かかる過ちしたるものを、いかでかは使はん』とて、国の内をも追ひ払はれ、『[redacted]』とて、館（たち）の内にも置いたまへらざりしかば、東国（あずま）の人になりて、ままも、今に、恋ひ泣きはべるは、罪深くこそ見たまふれ。ゆゆしきついでのやう　にはべれど、上（かみ）も下（しも）も、かかる筋のことは、思し乱るるはいとあしきわざなり。御命までにはあらずとも、人の御ほどほどにつけてはべることなり。

（同「浮舟」178～179頁）

女＝浮舟／さきの男＝薫／今の男＝匂宮という図式は、破局の構図で、「すべて女のたいだいしきぞ」という結論により、浮舟の運命は決定された。

君は、〈げに、ただ今、いとあしくなりぬべき身なめり〉と思すに、宮よりは、「いかにいかに」と、苔（こけ）の乱るるわりなさをのたまふ、いとわづらはしくてなん。〈とてもかくても、一方一方につけて、いとうたてあることは出で来なん、[redacted]、昔は、懸想（けさう）ずる人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ、ながらへばかならずうきこと見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき、親もしばしこそ嘆きまどはめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘れ草摘みてん、ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし〉、など思ひなる。

（同　184～185頁）

続篇における入水譚の引用は、表現の方法や効果のためではない。それは浮舟の自殺を幇助するため、無知な女に知識を習得させるためにある。「二人の男に迫られた女は川に身を投げて、その清算をせよ」……と吹き込むためだ。かくて浮舟は宇治川への入水を決意する。それは他者によって与えられたモノ、身代りの〈生〉への決別、身代りの〈生〉からの離脱であった。だから「手習」巻で再生した浮舟は、もはや身代りの〈生〉を生きるモノではなかったのである。

**注**

（1）三田村雅子「〈音〉を聞く人々―宇治十帖の方法―」『源氏物語　感覚の論理』有精堂一九九六年。

（2）注（1）に同じ。

(3) 林田孝和「贖罪の女君」『源氏物語の発想』桜楓社一九八〇年。
(4) 藤井貞和「形代浮舟」『源氏物語論』岩波書店二〇〇〇年。
(5) 長谷川政春「さすらいの女君（二）―浮舟」『物語史の風景』若草書房一九九七年。
(6) 原岡文子「境界の女君―浮舟―」『源氏物語の人物と表現』翰林書房二〇〇三年。
(7) 三田村雅子「召人のまなざしから」『源氏物語 感覚の論理』有精堂一九九六年。
(8) 阿部秋生「召人」『源氏物語研究序説』東京大学出版会一九五九年。
(9) 高田祐彦「中将の君の身分意識をめぐって」『源氏物語の文学史』東京大学出版会二〇〇三年は、物語に描かれていない中将の君の前史として、その呼称どおり父親が「中将」の職にあったであろうことを想定し、《北の方は大臣の娘であるから中将は大臣の孫娘にあたる。》《大臣の孫、そしておそらくは中将の娘として世が世ならそうした境遇に落ち着くはずもない血筋であるだけに、中将の君には女の身の生きがたさが痛感されたであろうし、それだけに八の宮から追放同然の扱いを受けたことは心底こたえたに違いない》《名門の血筋ながら女房となり、その出仕した折のみじめな経験が彼女を受領階級に追いやるとともに、強固な身分意識を形成させた。女主人公の母が女房経験者であり、その母の身分意識が女主人公の人生を左右するという点で、浮舟の人生には、女房の世界が抜きがたく関わっているのである》という。
(10) 工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』風間書房一九九四年年。
(11) 鈴木裕子「中将の君と浮舟＝縛る母・反逆する娘」『『源氏物語』を〈母と子〉から読み解く』角川叢書二〇〇五年。
(12) 平林優子「浮舟の入水について」『源氏物語試論集 論集平安文学』第四号、勉誠社一九九七年。
(13) 森岡常夫「宇治十帖の構成」『源氏物語の研究』弘文堂一九四八年。
(14) この点、鈴木裕子から口頭で教示を受けた。
(15) 近年の研究において、八の宮のイメージは更に悪いものとなっているだろう。外山敦子「弁の君と中将の君―〈母〉たちの浮舟物語―」『源氏物語の老女房』新典社二〇〇五年は、神田龍身「社会の欲望媒介装置＝浮舟―交換される欲望―」『源氏物語＝性の迷宮へ』講談社選書メチエ二〇〇一年の《八の宮との秘められた過去こそが弁の尼のすべての行動を根拠づけている》と八の宮との性的関係を推定する論を批判的に継承し、《神田のいう中将の君と同時並行ではなく、それよりも以前つまり北の方存命中からの長年にわたる関係であったと考えるとどうか。このことは、筑紫への下向が決まった求婚者を「よからぬ人」とする弁の尼の言葉からもうかがえよう。弁の尼の言葉の裏側には八の宮との密やかな過去があり、それがおのずと夫を見下す発言となって表われているのではないだろうか。同じく中将の君が、夫常陸介を八の宮と比較しては「さまあしき人」（東屋・三六頁）と見下していたことが思い合わされる。以上のような状況を考え合わせたとき、弁の尼が「八の宮のかつての召人」であったという語られざる過去が想定されることになるのである》という。
(16) 橋本ゆかり「抗う浮舟」『源氏研究』第2号翰林書房一九九七年。

（ひがしはら　のぶあき・本学助教授）